

明治以前のろう教育

ろう者の地位は低かったとされる記録が圧倒的に多いが、寺子屋で学んだろう児がかなりいたことも事実である。寺子屋は習字による学習が主体のため、自然に書き言葉から相当の言葉を習得したという記録も多く見受けられる。

海外事情の紹介

奈良のろう儒学者谷三山は、海外の文献を熟読し、海外にろう学校に精通していたようである。弟、杉敏三郎がろう者であることを気にかけていた吉田松陰は、谷三山と会い、長いこと筆談で議論を続け、海外でろう教育が進んでいる事を知ったようである。1822(安政 2)年 26 歳の時、『獄舎問答』で、「軍費があるのなら、それより西洋のように貧院・病院・幼院・聾啞院などをつくり、身分の低い者まですべての者が生活できるようにしなければならない」と話している。

幕末時代、維新の風潮が強まる中、幕府を守るために海外事情を知る必要があるとのことから、海外派遣を積極的にすすめた。海外では、ろう教育が進んでいることに感銘した者少なくない。

1866(慶応 2)年、福沢諭吉は「西洋事情」を著し、パリ聾学校を紹介した。1871(明治 4)年 9 月、山尾庸三は、ろう学校建設の必要性を訴えた「建白書」を政府に提出した。

民による京都盲啞院、官による東京訓盲院

京都盲啞院は 1878(明治 11)年に開校(院長 古河太四郎)

東京訓盲院は 1880(明治 13)年に開校

1880 年 9 月 6 日～11 日 第 2 回世界ろう教育科学会議（ミラノ会議）

偏った参加構成員により下記のたった 3 つの決議だけで、ろう学校から手話法教育を排他し、世界中のろう者の運命を大きく変えてしまった悪名高い会議。

決議1:「当会議は、口話が、ろう者を社会参加させ、かつ、ろう者により完全な言語知識を与える上で、手話よりも明らかに優れていることを考慮し、ろう者の教育には手話教育よりも口話教育を選択すべきことを宣言する。」

決議2:「当会議は、口話と手話の同時使用は、口話読唇術および明確な思考を妨げる懸念があることを考慮し、口話方法を選択すべきことを宣言する。」

決議4:「当会議は、完全な口話方法によるろう教育は、できる限り健聴者の教育に近づけなければならないことを考慮し、第一に口話のできるろう者が、言語の知識を身につけるために、一番自然で一番効果的な方法は、客観的(直感的)教育法、すなわち生徒に示された事物および事実を先ず言葉で、次に文字により表現する方法であることを宣言する。」

口話教育への推進

わが国の口話教育は、以下の4人(3人という説もあり)が中心になって推進したものである。大きな特徴として、聴者社会への通用性を重んじ、主体(ろう児)の立場は完全無視されたことである。

橋村徳一(名古屋市立聾学校校長)

東京聾啞学校師範部在学中に、伊沢修二の吃音矯正に影響を受け、1920(大正9)年、名古屋市立盲啞学校に純口話法による口話学級を設けた。

西川吉之介、娘はま子(滋賀県立聾話学校校長)

西川は、娘はま子の聴覚障害を克服する為、ボルタレビュー等の海外文献を参照しつつ、私財を投じて口話法の研究と普及に尽力した。滋賀県

川本宇之介(東京聾啞学校校長)

1922(大正11)年に文部省より盲啞学校制定のため海外に派遣された際、欧米の口話教育の理論と実際を学び、帰国後、樋口、西川、橋村等と共に口話法普及に乗り出した。1925(大正14)年日本聾口話普及会(後の聾教育振興会)の結成に参加し、機関誌「口話式聾教育」の発行や教員講習会の開催に尽した。彼の言語教育は、特に語話に重点をおく口話法で、文字の早期導入に強く反対し、教科書「国語初歩」の編集にもその点を主張した。

ライシャワー夫妻(宣教師)

聴覚障害の娘に日本では最高の教育を受けさせられないことを知り、小西信八の勧めでアメリカに帰り口話教育を受けた。そして口話教育を日本に移すことを使命とし、1920(大正9)年、東京牛込の教会内で、日本聾話学校を開設した。

ヘレンケラー賞

ろう学校の著名者たち

- ・ 吉川金造(わが国最初のろう教師)
- ・ 辻本繁(北海道八雲聾啞学院)
- ・ 小岩井是非雄(長野県松本聾学校校長)

川本口話賞会の解散

1999(平成11)年8月21日、川本口話賞会が解散した。理由として、基金減少、口話賞の対象者を推薦しない、あるいは口話賞の存在自体を否定する学校があること等による。

これは、口話法の終焉が見え始めてきたということではないだろうか？

ことわり: 中間報告のため、参考文献を省略させていただく無礼をお許しください。